国際演劇交流セミナー 2016

International Theater Exchange Seminar 2016

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長
流山児祥

1990 年代より近隣の韓国、中国の演劇人との交流、さらには東アジアの国々との演劇交流を日本演出者協会は重ねてきました。また、1999 年からは文化庁による本格助成のもと『国際演劇交流セミナー』を通年で開催するようになり、世界各国の演劇人を講師として、ワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディング等を連続的に開催しています。
『国際演劇交流セミナー』は、前理事長和田喜夫（当時事務局長）と一緒に立ち上げ、現在まで 17 年間開催されている協会のメイン事業の 1 つです。この事業を立ち上げた動機は「世界の同時代演劇をもっと知りたい」というわたしたち演劇人の根源的な衝動からでした。世界の《身近な他者》との「出会い」を求めて始めた事業です。

『国際演劇交流セミナー』は 17 年間にわたって韓国、中国、台湾、アジアの国々、カナダ、オーストラリア、東欧、北欧、アフリカといった 60 か国以上の国々の演劇人と交流し深く学ぶ機会を継続中です。当初から欧米中心の企画ではなく、日本で余り知られていない様々な国々との交流・紹介を目指しました。なぜなら、世界には多様な演劇が存在しているからです。世界の多様な「現在」を、演劇を通して知り他者と交流する、それが『国際演劇セミナー』なのです。

これで 140 回 60 か国近い国の演劇人との『国際演劇交流セミナー』を実施したことになります。招聘した講師の多くは各国の優れた劇作家、演出家、俳優、舞台美術家、演劇教育者などです。そんな演劇人の言葉がずっしり詰まった 201 6 年度の年艦です。この年鑑が、日本の演劇人にとって素敵な「世界」との「出会いの書」になれば幸いです。

すぐ隣の国にいる《身近な他者》との出会いの中に演劇は豊かに存在しています。パレスチナの友人が語るように「演劇は社会にとって必要不可欠なモノ」なのです。そんな《身近な他者》の熱いメッセージをあなたに届けます。世界には、いろんな演劇があるのです。この年鑑で「いろんな演劇」との素敵な出会いがあなたに生まれることを願っています。ありがとう！

イ ギ リ ス 特 集

【INTRODUCTION】

英国オールド・ヴィック劇場エデュケーション部門ディレクターによる
社会の課題に向き合う演劇ワークショップ

企画：前嶋のの

イギリス特集のコーディネーターである田室寿見子氏と初めて作業を共にしたのは、可児市文化創造センター“ala”主催の「多文化共生プロジェクト」という企画だった。可児市在住の外国人と日本人が一緒に演劇公演を行うというもので、田室さんが中心となって進めるなか、私は演出助手として企画に関わらせて頂いた。その田室氏が 2014 年度にイギリス留学されていた際、研修先のヤング・ヴィック劇場でエデュケーション部門を統括していたのが、今回の招聘講師、シャロン・カノリック氏だ。彼女はその後オールド・ヴィック劇場に移籍し、そこでもエデュケーション部門の代表を務めている。このセミナーでは、シャロンに加え、ならびに劇作家、演出家として多くの演劇教育事業に携わっているスチュワート・メルトン氏を招聘し、オールド・ヴィック、ヤング・ヴィック両劇場におけるエデュケーション・プログラムの紹介と、ファシリテーターを対象としたワークショップを実施した。演出家、俳優、演劇ファシリテーターの他、教師、研究者、劇場関係者など様々な方面から多くの参加申し込みがあり、この分野に対しての関心の高さが窺えた。

スチュワートによるワークショップでは、異なるシチュエーションに対応するエクササイズを数多く実践した。スチュワートはまず、参加者の誰もが必ず出来る事から始める。簡単なゲームで楽しく遊んでいたら、ある時それが演劇的な瞬間を作り出していたのが印象的だ。彼は自分が権威にならないことを常に意識し、参加者にとって負担のない流れをつくる事を重要視している。その言動はとてもソフトで、大きな声で場を制するようなことはしない。穏やかな進行のなかで、いつのまにか参加者がクリエイティブな作業に入る準備ができていくのが感じられた。時間の制約があり導入部分のみの紹介となったが、対象者別のエクササイズ、そのファシリテート法について、ともに考える場となった。

シャロンのレクチャーでは、イギリスの劇場事情及びオールド・ヴィック劇場、ヤング・ヴィック劇場の歴史、そして両劇場の多様な取り組みについて、具体的な事例を交えつつ紹介された。青少年や市民はもちろん、特別支援教室の子どもたち、移民・難民、メンタルヘルスの問題を抱える人々、セックスワーカーなど、対象となる参加者はプロジェクトごとに異なる。シャロンをはじめとする劇場スタッフが、どのようにそれらのコミュニティにアプローチし、劇場に招き入れ、参加者たちと演劇的な時間を共有したのか。テーマ別に日ごと 4 種類のレクチャーが実施されたが、豊富な資料と聴講者の熱心さが相まって、連日興味深い議論が交わされた。

日本の多くの演劇実践者、劇場関係者が“演劇の可能性”について模索し続けているのではないだろうか。劇場は、誰に向け、何を発信し、社会とどのような繋がりを持っていくのか。演劇実践者はそれぞれの現場において、参加者とどのような時間をすごすのか。皆にとって有益なこととは何か。この報告書がその考えを深める一助となることを願っている。

【 in 東　京 】

2016 年 11 月 21 日(月) ～ 11 月 27 日(日)　会　場：東京芸術劇場

【 in 豊　橋 】

2016 年 11 月 29 日(火) ～ 12 月 1 日(木)　　会　場：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT

■　11 月 21 日（月）13：30 ～ 16：30　会場　東京芸術劇場
■　11 月 30 日（水）18：30 ～ 16：30　　会場　穂の国とよはし芸術劇場 PLAT
ワークショップA　青少年や市民との創作ワークショップ　／　ディバイジング
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　（東京）鈴木なお　（豊橋）堀ひさの
（※ディバイジング　＝　既成の台本を用いず出演者と演出家が話し合いながら集団で創作していく演劇手法）

□　講師の挨拶
□　ウォーミングアップのエクササイズ
・シェイクアウト　　・ゴー、ストップ、ジャンプ、ドロップ　　・スローレース
□　フォーカス・ウォームアップ
・音と動き　　・しゃがむ、立つ　　・おばあちゃんの足音（だるまさんがころんだ）
・NEXT　　・NEXT の発展系　　・10 年ぶりの再会
□　フリーズフレーム（タブロー／演劇的静止画）
・グループスオブ　　・家族写真

■　11 月 22日（火）13：30 ～ 16：30　会場　東京芸術劇場
ワークショップA　青少年や市民との創作ワークショップ　／　ライティング・ディバイジングコラボレーション
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　鈴木なお

□　ウォームアップ
・ワー　　・しゃがむ、立つ　　・真昼の決闘　　・数を数える
□　ライティング
・フィールドトリップ　　・インスタントキャラクター　　・キャラクターを表現する
・ホットシート（人物に関しての細部を発見していく）　　・あらすじを作る　　・参加者の発表
・ワンラブ、ワンウィッシュ
（作品に対していいと思ったこと、こうした方がいいと思うことを一つずつ上げていく）

■　11 月 23 日（水・祝）13：30 ～ 16：30　会場　東京芸術劇場
■　12 月 1 日（木）18：30 ～ 21：00　　会場　穂の国とよはし芸術劇場PLAT
ワークショップB　　特別支援教室の子どもたちとのワークショップ・ファシリテーション
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　（東京）鈴木なお　（豊橋）堀ひさの

□　パートナートーク（隣の人と「今日何を学んで帰りたいか？」を 2 分話し合う→全体で共有）
□　アクティビティの紹介
・セルフマッサージ（講師の動作を全員で真似る）　・音とアクションをまわす
・ラバーチキン　　・フルーツサラダ　　・マジックハンド　　・アーティスト＆彫刻
・レインストーン　・セッション/ジャングルの動物で　　・　マン＆ミラー（人と鏡）
・工場の機械　　・Vote with your feet（足を使って投票する）　・フリーズフレーム

■　11 月 25 日（金）13：30 ～ 16：30　会場　東京芸術劇場
ワークショップC　　移民・難民に向けた演劇ワークショップによるアプローチについて
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　鈴木なお

□　パートナートーク
（「移民難民にとって芸術に取り組むことを難しくするバリアーとは？」を全体で話し合い問題を共有）
□　簡単な英語だけでやるエクササイズ（通訳を通さず、英語のみ（言葉を使わない）で行う）
・1 分間ですべての人と握手する　・言葉を使わず、規則的に並ぶ
・アイズアップ（アイコンタクトのみで動作する）・セブンス　・anyone　who（なんでもバスケット）
・見えないものを回す。　　・This is for you（参加者の想像力を使うということに有効なゲーム）
・棒を使ったエクササイズ（共同性を感じることができるエクササイズ）
・赤ずきんちゃん　・新しい設定で物語を作り直す（赤ずきんを元に新しい設定で物語を作る）

■　11 月 26 日（土）13：00 ～ 18：00　会場　東京芸術劇場
ワークショップ D　　ストーリーテリング・パフォーマンス
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　鈴木なお

□　短い自己紹介
□　ウォームアップ
・クリックキャッチボール（カンパニー全体を捉える視点を持つのに有益）
・YOU（あなた）　・ワンワード（二人組で一語だけ掛合い、文章、ストーリーを即興（2 分間）で作る）
・insart a lie（嘘を差し込み、嘘を当てる）　・1min loud（社会に対しての不満の爆発（1 分間））
□　インプロビゼーション（即興演劇）
・No he（she）　didn't　　・Never mind the ○○
・ストーリーストーン（小石に描かれた絵でストーリーを作る）・ミュージアム オブ ミー
・マジックハンド　・パペット（二人組でパペットとあやつる人にわかれて行う）
・アーティスト＆彫刻　・エブリデーヒーローズ　・ナラティブマイム

■　11 月 27 日（日）10：30 ～ 13：30　会場　東京芸術劇場
ワークショップ E　　アンサンブル・ムーブメント
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　鈴木なお

□　ウォームアップ
・ジャイアント（巨人）、ウィッチ（魔女）、ゴブリン（全身を使ったジャンケン）
□　ムーブメントについて（全員を巻き込むアクティビティ）
・アップステージ、ダウンステージ　・暗殺者とボディガード　・バランス・ザ・スペース
・ムーブメント・ディテクティブ（探偵）　・大げさサークル　・記憶から作るムーブメント
・「ビューポイント」のエッセンスを使ったエクササイズ
ムーブメントのッバリエーション

■　11 月 21 日（月）18：30 ～ 21：00　会場　東京芸術劇場
■　11 月 29 日（火）18：30 ～ 21：00　会場 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT
レクチャー A　ヤング・ヴィック劇場＆オールド・ヴィック劇場のエデュケーション・プログラム紹介
講師　シャロン・カノリック　　通訳　（東京）鈴木なお　　（豊橋）堀ひさの　川上綾

□　イギリスの演劇事情
・West End Theatre　　・Off West End Theatre　　・Fringe Theatre
□　劇場の概要と歴史
□　各劇場の取り組み
□　学校との仕事
・ステージビジネス／ Stage Business　　・Introduction to Directing course　　・Old Vic 12 scheme
・コミュニティとのプロジェクト　　・Kitchen Talk

■　11 月 22 日（火）18：30 ～ 21：00　会場　東京芸術劇場
レクチャーB　クリエイティブなアウトリーチ　～ 多様な文化的背景を持つ新規参加者を巻き込むには ～
講師　シャロン・カノリック　　通訳　鈴木なお　青井陽治

アウトリーチ、普段演劇や芸術に触れる事の少ないグループや個人とつながる為のヒントについて
・アウトリーチが深く関与した『マクベス』（青少年と一緒に作ったプロジェクト）

■　11 月 25 日（金）18：30 ～ 21：00　会場　東京芸術劇場
レクチャーC　メンタルケアを必要とする参加者のための演劇ワークショップ・ファシリテーションレクチャー
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　鈴木なお

□　ヤングヴィックでのプロジェクト
□　通院患者のプロジェクト
□　ケーススタディの紹介
・サマー（8 歳の少女）について　　・エマニエル（14 歳の少年）について
・ワークショップの内容　　・シェアリングに関して
□　入院患者とのプロジェクト

■　11 月 27 日（日）15：30 ～ 18：00　会場　東京芸術劇場
レクチャーD　ワークショップの評価方法
講師　スチュワート・メルトン　　シャロン・カノリック　　通訳　鈴木なお　池内美奈子

□　パートナーシップス・イン・ラーニング／ Partnerships in Learning
ステージ 1　プランニング
ステージ 2　情報を収集する
ステージ 3　組み立てる・解釈する
ステージ 4　反映して前にすすむ
ステージ 5　報告する・共有する
□　定量的評価
1. プロジェクトに取り組む事で芸術に参加することを可能にする。
2. 一週間の中で業界のスペシャリストから深い演劇スキルを学ぶ。
3. 芸術の中で広範な知識、深い理解を残して終わる。
・オールドヴィック・機会均等の為のアンケート
□　定性的評価
□　参加者の状態、評価を知る為のアクティビティ
・チェックイン
・ワンラブ・ワンウィッシュ
・気球の絵を使って
・Draw around your hand　手のまわりに描く
・木の絵を使って
・Where do I stand?　　自分の立ち位置はどこか
・Post cards

シャロン・カノリック / Sharon Kanolik

オールド・ヴィック劇場エデュケーション＆コミュニティ部門代表、脚本家。
シャロンは市民参加型のアート・プロジェクトを10年以上にわたってプロデュースしており、その活動を、オールド・ヴィック劇場やヤング・ヴィック劇場を中心に、バービカン劇場やトライシクル劇場など、ロンドンの主だった公共劇場で展開している。
特に、メンタル面で問題を抱える青少年や難民など、マージナルな位置に身を置く人々に向けたアート活動に力を注いでいる。

スチュワート・メルトン / Stewart Melton

カンパニー・オブ・エンジェルズ アソシエイト・アーティスト、元サザーク・プレイハウス　ユース＆コミュニティ部門ディレクター、劇作家、演出家、ドラマトゥルグ。スチュワートはヤング・ヴィック劇場やサザーク・プレイハウス、ユニコーンシアターなどで長年にわたってエデュケーション事業を担当しており、青少年やその家族とともに創作ワークショップや劇作、ストーリーテリング・ワークショップなどを実施している。
その活動においては小中学校の普通クラスだけでなく、失読症や学習障害のある子どもたちをスタッフとして迎え、特別支援教室の生徒との創作も積極的に展開している。

ワークショップA
青少年や市民との 創作ワークショップ

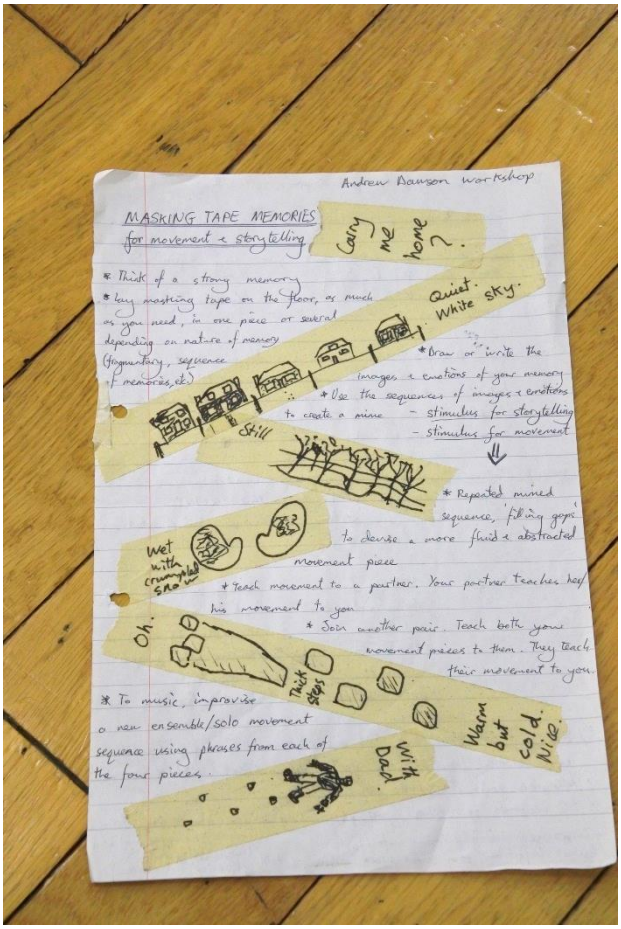
〇スチュワート

私はワークショップの場において、自分がエキスパートだという態度をとらないようにしています。このフィールドのエキスパートは子どもだからです。もうすでにご存知のエクササイズをやることもあるかと思いますが、私のファシリテートの方法を知って頂く、もしくは私の失敗から学んで頂けたらと。また皆さんが経験されたことにもとても興味がありますので、そちらもぜひシェアさせて下さい。

今日のテーマはディバイジング、ライティング・ コラボレーション。ディバイジングは日本であまりなじみがないかもしれませんが、我々はプラクティカル・ライティングと呼んでいます。ペンもキーボードもなく執筆する状態。身体、声を使った即興の中で何が出てくるか、それを抽出していく作業になります。最終的に作品としてどう編集して行くか、それはあとの話になります。
なぜディバイジングを使うのか？　ロンドンではいろんな年齢層と仕事をしています。英語にもいろんな種類がある。イギリスに移住して来たばかりの子もいれば、イギリス生まれの子もいる。書く事が好きじゃない子もいます。自分を表現するのには、ムーブメント、絵を描く、歌う、音楽などのほうが表現しやすい子もいる。

〇シャロン

紙に書かれた文字と対峙すると、それだけで躊躇したり入りにくい子もたくさんいる。ディバイジングの方が作品づくりをしやすいということがあります。



〇スチュワート

もう１つの理由として。子どもって素晴らしい劇作家、パフォーマーなのです。子どもの発達について、ドラマトゥルギーに関してのある説があります。ごっこ遊びの中で登場するのが例えばお父さんとお母さんだったり、緊急事態の消防士だったり、アニメのキャラクターだったりするわけですが、いかなる場合においても彼らは自分たちで劇作をしているわけです。自分自身が俳優であり演出家であり、言葉を作っている脚本家でもある。家具を動かして美術デザインをしたり、何か適当な服を着て衣装デザインもする。歌を作ったり音を鳴らしたりして音楽家にもなる。訓練を受けていなくてもそういう事が出来ちゃうんです。子どもと仕事をするとき、私は彼らのそういう部分を大事にしたいと思っています。

２日間、２コマあります。今日は子ども相手のワーク、明日は 10 代や大人相手のワークをご紹介したいと思います。実際には子どもの為のワークは大人たちにも使えます。

■ウォーミングアップのエクササイズ

〇スチュワート

初めて会う子どもたちとは、みんなが解放された自由な雰囲気をすぐに作りたいため、最初にアホっぽいウォーミングアップをします。すごくまじめに、だけどアホっぽく。自分が権威ある立場に見られないように。コラボレーターとして彼らの仲間に入る事が大事です。

●シェイクアウト

〇スチュワート

「僕の真似をして」と言います。

手をぶらぶらする、腕を回すなど、身体の様々な部分をシンプルに動かしていく。

〇スチュワート
　何も言わずに頻繁にやることを変えると、みんなが集中しているかが分かります。「指を動かした事のない方向に動かせるかな？ やってみようじゃないか。手首はどんな動かし方が出来る？　肩は？足は？　……気がつけば身体が参加しているだろ？ だったら使おうぜ」そうやっていく中で、もはや真似ではない独自の動きが生まれていきます。

〇スチュワート
　イギリスの学校では “間違い”を意識してしまう傾向がある。まずは“やった”という達成感を持って欲しいから、出来ることしかやらせません。そうすると頭の中に“もしかしたらドラマ作りは自分にもできることかもしれない”という種が植え付けられる。ドラマ作りに正しいも間違いもない。もちろんスキル、経験値はある。でもルールは１つだけだと僕は子どもたち言います。「退屈であっちゃいけない」。それだけ。

●ゴー、ストップ、ジャンプ、ドロップ

ファシリテーターが「ゴー」と言ったら歩く、
「ストップ」で止まる。
「ジャンプ」でジャンプ、「ドロップ」でしゃがんで床をさわる。

〇スチュワート
みんな上手すぎる。だから指示を逆転させよう。

合図を逆の意味で捉えて動く。「ゴー」はストップ、「ストップ」は歩く、
「ジャンプ」はドロップ（しゃがむ）、「ドロップ」はジャンプ。

●スローレース

部屋の端に一列へ並ぶ。「位置について、ヨーイ、ドン！」の合図の後、全員スローモーションで走り出す。ずっと動き続けなければならない。両足をついてもいけない。
向こうの壁に最後につい　た人が勝者。

〇スチュワート
スローモーションというスキルは子どもに有効です。自分自身をずっとコントロールしている。子どもはいつも急いでいるからスローモーションで細かいディテールまで感じさせる事が大事です。こんな声かけをします。「動きがすごくいいね。もっと表情をつけてみて。自分の身体をコントロールして。更にゆっくりいける？」常に正しい事をやるのは子どもにとってプレッシャー。だから誰も間違えない方法をとります。

■フォーカス・ウォームアップ

〇スチュワート
休憩時間のあとは高揚している時もあるし、楽しくってくすくすという笑いがおきやすい状態。そうだといいと思います。そこで違うアクティビティをやることによって、一旦みんなを落ち着かせることも有益です。思考の照準がフォーカスされて、新しい、ドラマ的な事が受け入れやすくなる。

●音と動き

円で立って、スチュワートが音とアクションをやる。
刀で斬るようなしぐさでハッ！ という。

〇スチュワート
同じ事ができるかな？と　聞くと出来るというので、カウント 3、2、1 の後みんなで一緒にやります。タイミングがバラバラだったら、もうちょっと上手くできるかな？ と聞いてもう一度やります。

カウントなしで同じ事をやる。ファシリテーターを見ていて、やりそうだなと思った時一緒にやる。ハッ！ハッ！ハッ！となんどか繰り返す。
リーダーを違う人に頼む。リーダーを変えて何度か繰り返す。

〇スチュワート
次のリーダーはみんなを騙して、我々にとって難しいようにタイミングをとって。

●しゃがむ、立つ

リーダーは手を前に出し、ゆっくりしゃがんでいく。ゆっくり立つ。
みんなはリーダーについて同じ動作をやる。
リーダーを変えて同じ動作をやる。
リーダーなしで同じ動作をやる。
言葉は使わずに全員で合意して進まなければならない。

〇スチュワート
子どもとやるときは、「大変だけど絶対できるから」と声かけをします。どうして上手く行くか、言葉で説明出来ないけど。

1 人ずつ合図なしでしゃがんでいく。2 人以上が同時にしゃがみ始めたら最初からやり直し。

〇スチュワート
お互いを聞くということが大事です。（何度かトライするが上手くいかない）

〇スチュワート
　上手くいかないときは「どうしたらいいかな？」と聞きます。皆さんはどうしたらいいと思いますか？

〇参加者
　もうちょっとサークルをコンパクトにしたらどうか。

〇スチュワート
　いいアイディアです。みんなお互いが見えるようにサークルを小さくしよう。失敗しても気にしないで。子どもが“上手くなっている”と感じることが大事です。

〇スチュワート
　子どもと新しい作品を作るとき、既存の話であろうが、子どもたちと作る新作であろうが、テーマに対する質問から初めます。以前ホメロスの『オデュッセイア』を翻案化したものを 10 歳児のクラスでやった事があります。内容は 10 年間もの間、迷子になる英雄の話でしたので、「迷子になったことある？」という問いかけから始めました。大勢の前で質問に答えるというのはとても怖い事です。だから僕はまず「パートナートーク」というテクニックを使う。1 対全員ではなく、2 人組になってお互いに話します。それじゃ皆さんもやってみましょう。お隣の人とパートナーになって。……たまにパートナーが見つからない子が出てくる。僕はそういう子の 1 人だったんだよ。人気度が低い。だからいつもチェックすることにしています。パートナーがいる人手あげて。パートナーがいない人、手をあげて。

　Q1 なぜ子どもと物語を書いたり、ディバイジングをしたいのか。
　Q2 この方法がいいところはどこか？

　2 分間パートナーと話す。

〇スチュワート
　あと 1 分。……10、9、8、7、……1。やめるときは 10 カウントダウンを使います。いきなり止めると子どもたちは遮られたと感じるから。イギリスでは大人が子どもに対して無礼な振る舞いをしがち。僕はもっと子どもを尊重したいと思っています。

●参加者の回答を発表 ＜各ペア 1 つずつ発表＞

　個人の考えを受け止めることができる

〇スチュワート
　僕はこういうとき、発表したことをただ繰り返して言うことが多い。いいね、とか感想を言う訳ではなくただ繰り返す。そうすることで出て来た意見が確信めいたものになり、すべてを同等に扱う事ができる。

・子ども達の自由な発想がでてくる

・物語をつくるときに、自分の考えとは違う方向にいける

・いろんな人の立場になって考えられる

・お互いを尊重できるようになる

・他の人と作る事で想像力が広がる

・達成感、チームワーク、他者を理解する力がつく

・子どもは世界に対して先入観がないので、凝り固まっている大人の考えから解放するのを手伝ってくれる

・大人が先に何かを差し出すと、その正解を探してしまう。子どもから広がるアイディアを大人が楽しむことができる

・自分はクリエイティブでいていいんだ。言われたことをやるだけでなく、想像力を使ってやりたいことをやっていいんだと認識できる

・できたものの優劣よりも、その過程のほうが子ども達にとって大事だ

・自分はこんなものが好きなんだと、子どもが自分自身を発見できる。

〇スチュワート

コラボレーションによって互いを聞く、理解する、違いを受け止めるということに繋がる。また自信を持って人前で自分の意見を言えるようになる。他者を演じる事によってさまざま立場からものを見ることができる。僕は生まれもってのパフォーマーじゃなかった。でも自分が作った人物がどんなことをしゃべるのか興味があった。演技をしたくない子も貢献できる方法があるので、それを舞台上で見られたらなあと願っている。僕にとっての利益は、子どもたちの体験、興味について知る事です。それを自分の作品に取り入れる事ができる。子どもの生活がどういうものか、しっかり書く事ができる。大人が上演するこどもに向けた作品はたくさんあるけど、子どもの時にどんなふうだったか、忘れてしまった大人によるものが多い。もし忘れてしまったのなら、子どもと話せばいい。また社会的な側面から考えると、イギリスでは演劇は上流階級的な芸術だと捉えられている節がある。演劇実践者たちは自分の培って来た方法をノンプロの人たちにも分かりやすく紹介できたらいい。一般の人達にとって宇宙人のような存在ではなく、いい仕事をする人になれたら、一緒に公演をつくることによって、演劇はみんなのためのものだと知ってもらえる。子どもが書いたり上演することによって、それが形に見えるようになると考えています。

〇スチュワート

新しいドラマッチックなシーンのアイディアを考えるとき、ゲームを使って基盤を作ることがあります。

●おばあちゃんの足音（だるまさんがころんだ）

1 人がおばあちゃんになり部屋の端に。他の全員は反対側の壁にスタンバイする。
おばあちゃんの足下に美しいペンが置かれていて、みんなはそれが欲しくてとりに行く。
だけどおばあちゃんに見つかったら大変。だからおばあちゃんが目を閉じて後ろを向いている間のみ、みんなは前に進むことが出来る。おばあちゃんが目をあけて振り向いたとき、みんな

はフリーズしなければならない。動いてしまったらおばあちゃんに名前を呼ばれ、レースから外れる。

〇スチュワート
子どもには「ゆっくり着実に、無音で」と声かけします。

（2回目）フリーズする時、身体の高さを変える。低い、中ぐらい、高いの 3段階。2回続けて同じ高さでいたらレースから外れる。

〇スチュワート
なぜ高さチェンジのルールを加えたか。観ているほうとしては、より興味深い。
ムーブメントのシーンを作る時に、このゲームの記憶を思い出すんです。
いろいろな高さ、形があったほうが面白い。

（3回目）フリーズした時、隣の人と繋がる。手を肩に、背中合わせ、お尻、なんでもいいので、出来るだけいろんな方法の繋がり方を見つけて。

〇参加者
おじいちゃんにもルールを加えたらいいのでは。→80歳の関節炎を持った老人という設定にする。おじいちゃんが言いそうな事を言ってから振り向く。

〇スチュワート
個々で動いているときより、観ていてずっと面白かった。こういう時に子どもたちに「何かを連想するような瞬間はあった？」と聞きます。皆さんどうでしたか？

・砂鉄
・蟻

〇スチュワート
蟻は何に向かっていたんだろう？

〇参加者
キャンディの破片。

〇スチュワート
では蟻でやってみよう。

蟻としておなじ動作を行う。おじいちゃんはなしで、キャンディが欲しい蟻を演じて動く。

〇スチュワート

スローモーションでやって。
……いいね。でも表情が足りない。もっとキャンディを欲しがっていたとしたらどうだろう。
…… いいね、すごく変わったよ。

スピード１～４段階で変えて、だんだん早く動いてみる。

動きのあるシーンにすごく有効です。ルールがはっきりしているので、子どもたち主体で動く事が出来る。以前『真夏の夜の夢』を子どもたちと作ったとき、子ども達が森の木々の役割としてこのムーブメントを使った。木々が恋人達に近づいていくような表現にしました。

●NEXT

サークルになって誰か 1 人が中に入り、何かポーズする。2 人目が中に入り、1 人目のポーズに合わせて違うポーズをする。ファシリテイターが「ネクスト」と言ったら 1 人目は抜け、3 人目が全く違うポーズを作る。これを続けてみんながかわるがわる、どんどんポーズを作っていく。考えすぎないように「ネクスト」を早く言う。

どこかでストップして、そのポーズから発想し、何が起こっているのか、意見を言い合う。どこだろう、誰だろう、どんな関係か、どんな状態か？

●NEXT の発展系

シャロンがショールにくるまり、ホームレスになる。「ネクスト」と言ったら誰かが中に入り、台詞を一言言い、アクションを 1 つをやる。これを続けていくつかの場面を即興でやっていく。

〇スチュワート

これはアイディアをどんどん出すのにいいエクササイズ。ここから物語へつなげることもできる。子ども達がやるとき、僕は誰が何を言ったかをメモっておいて、それを劇作に入れます。自分がいった台詞が脚本になると子どもはすごく興奮するんです。

●10 年ぶりの再会

パートナーを決める。

〇スチュワート

５から数えるから、１になるまでにパートナーを見つけ、部屋のはじとはじに立って向かい合って。

こちら側は親、あちら側は子ども。2 人は 10 年ぶりに会うという設定で、即興で演じる。

〇スチュワート
　何が起こるのかは皆さん次第です。

〇スチュワート
　今の段階で完璧な名作を求めていない。何かのアイディアを共有したいだけ。僕はそれを強調します。子どもは正解を求めてやりがち。だけど正解も不正解もない、単に面白いね、興味深いねというだけだから。

　　すべてのペアを続けて発表する。（演じ終わったら座る）

〇スチュワート
　（ある組の発表で）その沈黙をもっと長くやって。言葉が出てくるギリギリのところまで待って。（再び演じる）……ありがとう。最初から 2 人が作っていた沈黙がすごく面白かった。子どもっていつも結果を急いでしまう。でもドラマっていうのは、大抵の場合その対峙を引き延ばす事にある。こういうことをやる時、僕は録音します。感情的な物を出したらそれを誉め称えるようにしている。

■フリーズフレーム（タブロー／演劇的静止画）

〇スチュワート
　劇作家にとって、場面を構築して行くことは大変。障害をどう乗り越えるか、その描き方で作品の善し悪しが決まる。演劇的静止画をみんなで作ります。グループ作業するとき、子どもはいつも親友と組みたがる。でもそうすると大体いい瞬間が生まれない。

●グループスオブ

　　部屋を自由に歩く。
　　兵士のように、ペンギンのように、スローモーションで、四つん這いになって。
　　ファシリテーターが「グループスオブ“〇（数字）”」と言ったら指定されたその人数のグループを素早く作る。

〇スチュワート
　今度は違う人とグループになるんだよ。と声かけをします。

　　グループスオブ〇を何度か繰り返す。

●家族写真

　　6 人グループになったところで、1 分で「家族集合写真」のフリーズフレームを作る。

〇スチュワート

各グループの形をみていいところ、改善したらいいと思うところを言っていきます。例えば、いろんな高さがあっていいね。このあたりが空いているからもう少しこっちに来てみようか。このときこの人物は何を考えているだろう？　とか。作品づくりの時は、3つのフリーズフレームを作ってもらう。物語の最初、中盤、エンディング。今までエクササイズで出て来たシチュエーションからつくることも出来ます。蟻、再会のシーン。その前、その先はどうなるだろうという事を想像してみる。そこからフリーズフレームを作り、グループ発表して全員でシェアします。発表の時は「ライツ・ダウン」「ライツ・アップ」を使う。
「ライツ・ダウン」といったら観客は目を閉じ、「ライツ・アップ」で目をあける。暗転、明転を自分で作り、3つのシーンから成る、フィジカルのスライドショーを楽しみます。フリーズフレームができたら、それを動かすことができる。大抵僕はそこからスローモーションで動いてみてとお願いします。それを先にやると、次に普通の早さでやるときにアクションのことだけに集中できるようになる。そこに台詞を足していきます。
ここで時間が来てしまいました。ありがとうございました。みんな、自分に拍手。

4日目　2016年11月25日（金）13：30 ～ 16：30　会場：東京芸術劇場 5F シンフォニースペース

ワークショップＣ
移民・難民に向けた演劇ワークショップによるアプローチについて

〇シャロン
我々の国は今難民危機という状態になっています。ですがそうなる前からイギリスには世界中から移民難民が入って来ていました。難民相手に積極的に活動している機関としては、カン・インターカルチュラル・アーツ(CAN)、またオーバル劇場があげられるでしょう。私の仕事では、13歳から21歳の青少年を相手にすることが多いです。
移民・難民の少年は、ほとんどの子がひとりで何千マイルもの旅を経てイギリスに渡って来ている。18歳以下の青少年は大抵ホストファミリーの元で暮らし、学校に通っています。(18歳以上になるとイギリスに残れるかどうか話が複雑になります)ロンドン東部に拠点があるドスト(DOST)という団体、公的なアドバイスをしたり、英語習得の為のサポートをしたりしていますが、私はこの団体とよく仕事をしています。難民の子供たちを観客として劇場に招く時、その公演内容が適正であるかが重要です。ある作品で彼らの多くは寝てしまった。また暴力性があったり、刺激の強いものは避けるようにしています。彼らを招く時には、こちらが歓迎しているという態度を見せる事が大切です。
ロンドンの北西部にある「トライシクルシアター」は、地方政府が運営する劇場です。演劇を教えるのに英語を使うということで公的資金が出ている。シリア、スーダン、ブラジル、ウクライナ、ポルトガル、インド、アフガニスタンの人たちが一緒に公演をしています。
私は以前、フランスの「ジャングル」と呼ばれるキャンプでも仕事をしました。そのキャンプにはおよそ 10,000人もの難民が住んでいた。フランスの中で一番イギリスに近いところで、何年もそこに

住んでいる人もいました。彼らの希望としてはイギリスに渡りたい。いつかトラックや電車にかくれて乗り込んで。イギリスの政治的な状況が変わる事を期待していました。

〇Q 参加者

フランスよりイギリスに行きたいというのは、経済的に裕福だから？

〇シャロン

私も同じように疑問に思っていました。私が会った人はイギリスを理想化していました。現実と一致していない。それと言葉という要素も大きいと思います。英語を話す人が多いですから。移民・難民の人たちに聞くところによると、フランスで彼らは歓迎されていないようです。でも「ジャングルでなく受付センターに行こう」と難民達に声かけしていたフランス人もいました。

あるアフガニスタン男性の話。9 年間イギリスで生活しましたが、国外退去になった。3 ヶ月間自国に戻りましたが、戦争が激しく、4 ヶ月かけてまたジャングルに戻り、そのあとはフランスの海軍になるかもしれないと話していました。

ジャングルはもともと荒れ地と化したところ。海が近く、風が冷たい。そしてよく雨がふる。土ぼこりが巻き起こる。そんな中でのテントで生活です。戦争から逃れて長い旅路を経ている人たちは何も持って来ていない。ビーチサンダルで歩いている人さえいました。心がつんざかれるような場所です。だけど一方で、あんなにフレンドリーな場所はないとも思う。行ったところどころでハローと言われ握手しました。食べ物をくれたり、帽子や手袋をくれようとする。私が何も渡さなくてもです。

私がジャングルへ行った理由としては、イギリスの劇作家 2 人がそこで「グッドチャンスシアター」という演劇スペースを作っていたことがあります。ジャングルに住む人たちは毎日「待つ」ことをしていました。イギリスに渡るチャンスを待つ、政治的な環境が変わる事を待つ。図書館、子どもセンター、協会、モスク、レストラン、様々な施設も存在した。ただ他にやることはない。そこでイギリス人の 2 人は、200 人収容の巨大なテントを建てて毎日何かを開催していた。演劇、美術、音楽、ダンスのワークショップなどです。定期的に、大体同じ時間に、何かが行われていることが重要でした。そうすると皆さんの生活の構成に関わる事ができる。

2 ヶ月程前、フランスの上層部がこのキャンプの閉鎖を決め、そこにいる人たちを全員退去させました。難民の多くはレセプションセンターに行ったり、消えた人もいます。まだ田舎の方に隠れて住んでいる人もいるかと思います。建物をブルトーザーで壊されたり、焼かれたところもあるそうです。自分自身、それに対して寂しいとか悲しいというのも興味深いことでした。なぜなら、逆に言えばそういう場所が存在したこと自体、最初から悲しいことなのですから。例えるなら第三世界に行っているみたいな感じだった。でも当時はその人たちにとってキャンプはとても大事な場所だったんです。

●パートナートーク

Q 移民難民にとって、芸術に取り組むことを難しくするバリアーとは何か？

・言葉
・宗教的に人前に出る事を好まない

◯シャロン

男女が一緒にいる事自体、違和感のあることかもしれない。大英博物館での公演の際、ラマダンとぶつかったことがあります。彼らはとてもハングリーで疲れていた。そのような状況では演劇に気持ちがいかない。

・経済的な問題。芸術鑑賞してもおなかが満たされないから。
・(台湾の参加者)台湾の演劇クラスにいたが、ホームレスの人と作業したことがあった。
お互い信頼し合って、考えを統合するのが難しい。

◯シャロン

彼らの生活が精一杯で忙しいということもあります。ハヌイットというアフガニスタンの男の子がいましたが、突然養父母が面倒見れないと言いだした。1 週間私たちの家にいたが、その後 50 マイル離れた町へ行きました。今はいい生活がおくれているようですが、その時我々は本当に寂しかった。

■簡単な英語だけでやるエクササイズ

◯シャロン

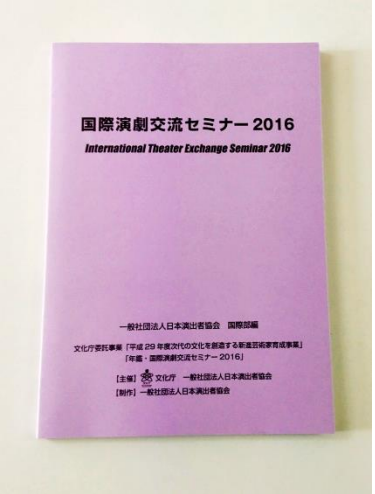
英語力が全く違う人とやることがあります。今日は簡単な英語だけでやってみましょう。
(以後、シャロンの英語のみでエクササイズを行う。)

● １分間で全ての人と握手する

続き、詳細は、国際演劇交流セミナー2016年鑑にて

国際演劇交流セミナー2016

――― 年 鑑 ―――



■ 目　次　Index ■

メキシコ　特集 – リーディング・レクチャー・シンポジウム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
アフガニスタン特集 – ワークショップ・リーディング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
韓　　国　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
マ カ オ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
ウェールズ　特集 – ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
イ ギ リ ス　特集 – ワークショップ・レクチャー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
国際演劇交流セミナー実施年表【1999 年～2016 年】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・214

■ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。
TEL ： 03-5909-3074 ／FAX ： 03-5909-3075
E-mail ： j_d_a_info@yahoo.co.jp